

資源環境経済学特別演習Ⅱ 議事録
2013年度 第7回

報告題名(title) : 農地の交換様式に関する考察 (中間報告)			
報告者(name)	井坂 友美	日時	10月31日 午後3時～
所属分野(labo)	資源環境政策学	場所	第2講義室
座長	志賀 あゆみ	議事録担当者	江守 智夏子
出席者 長谷部、小山田、米澤、米倉、冬木、高篠、伊藤、池田、山口、カライ、趙、ユニクロス、今井、井上、佐々木、志賀、西田、朴、オウ、渥美、江守、小田嶋、金、藤井、町田、秀			
報告要旨(Abstract)			
<p>地域差を伴う農業構造の変化が着実に進むなか、「担い手論」として地域ごとの上層経営の性格規定および分類がなされ、とくに近年は集落営農による地域農業の持続可能性が検討されてきた。しかし、農業構造の変化を惹起する農地移動のメカニズムについての議論は、「分解論」以降にほぼなされなくなった。本報告は、そのメカニズムについて、分解論がしてきたように生産様式に着目するのではなく、その交換様式に着目して議論することを試みる。交換様式への着目とはすなわち、農地の交換が行われる場に、どのような人間関係が伴っているかに注目することである。これは、農地の交換が行われる場＝農地市場の特殊性に関する、社会学的アプローチとも言える（さらに、近年の農地移動に関する村落地理学の研究成果を鑑み、地理学的手法としてGISを活用してアプローチしたい）。</p> <p>そこで本報告は、構造変化が都府県平均並みに進む個別対応型地域の平坦水田地域として、茨城県桜川流域を選定し、個別上層農家への農地移動(農地集積)における具体的な農地の交換を調査する。まず、40ha規模の個別農家4名(n, o, f, t)（および比較対象として、若干の条件不利地における10ha規模の個別農家h）を対象に、稲作借地に限定して、農地市場の地理的な成立範囲を把握する（その際、社会学的な視角から、村落や集落の境界を指標として地理的範囲を考察する）。次に、その市場の地理的範囲を規定する人間関係、およびそこに作用する互酬性の有無を明らかにすることで、交換様式に着目した農地移動メカニズムの説明を試みる。農地市場の地理的範囲は、GISを活用した圃場のマッピングにより、人間関係や互酬性は、貸し手との関係を借り手にインタビューすることによる。</p> <p>以下、現時点で得られた調査結果（主にn, o, f）をまとめる。経営田面積が100haの筑波地区O集落において、o経営は旧村外を含む3集落にまたがって借地しており、経営田面積が40ha規模の真壁地区N集落および新治地区F集落では、n経営とf経営は、旧村外を含む8集落にまたがって借地していた（しかし、地形的要因から、n経営とf経営の農地の集積レベルには明らかながいが見られた）。さらに、この範囲を規定する人間関係について、従来から議論されてきた「血縁・地縁」の観点から分析を行った。血縁にある地主は、n経営は「集落内」に1人（「集落外～旧村内」と「旧村外」を合わせて41人）、o経営は「集落内」に10人程度（同39人）、f経営は「旧村外」の少数（同70～80人）とばらつきがあり、地主数全体に占める割合が高くないことから、血縁による農地市場の規定性はもはや高いとは言えない。他方、地縁に関して、講・組などの互助組織のメンバーであるか否かが農地の貸借を規定することはなく、より広い範囲（具体的には5ha以上販売農家数の少ない近隣の集落）から借り入れていることを確認した。そこでは、作業受託や転作受託による人間関係に加え、知人からの紹介や、過去の経営作目による農家間のネットワークに注目できた。したがって当地域では、従来の血縁関係というよりも、地縁、および「血縁・地縁よりも広範囲の縁」に支えられた人間関係による農地の交換が行われ、そこにおける互酬性としては、悪条件の圃場の地代でも安くしないことや、借地の土地改良投資を怠らないことが挙げられた。</p> <p>今後は、借地を年代別に整理し、また貸し手に対するインタビュー調査も追加的に行うことによって、以前の借地と近年の借地の量的・質的な差異を検討する。それによって、「血縁」、「地縁」、「血縁・地縁よりも広範囲の縁」それぞれの人間関係による農地の交換の性格を、互酬性の内容とともに明らかにし、農地移動メカニズムを説明しうる論理を抽出することが課題である。</p>			

質疑・応答(Q & A)

米沢：地図を使う場合は注ではなく地図の横に判例をつける必要がある。また、一般的にスケールの予測がつくもの（都道府県等）であってもスケールをつけた方が良い。図の中で使われている数字については、その数字が登場する全ての図の横に説明をつけなければ理解が追いつかなくなる。社会関係と相互報酬との関連付けについて、「血縁・地縁などのデータ」を「圃場ポイントデータ」と重ね合わせて検討するとあるが、「血縁・地縁などのデータ」とはどういうデータなのか。個別農家としての属性という意味であれば、それは「圃場ポイントデータ」の中に取り入れて考え、「地縁・血縁等のデータ」としては、その農家が含まれる地域の属性を取り入れるべきではないか。

井坂：今後、地域の属性を取り入れて再度検討する。

米沢：農地市場の地理的な成立範囲についての調査結果が3つ挙げられているが、それぞれ1人の経営者について調べた結果なのか。

井坂：それぞれ1人の経営者について調べた結果である。

米沢：狭い範囲の一般的でない地図を使う場合は、スケールをつけることがより重要である。

井坂：論文に用いた地図ではつけていたが、配布資料にもつけるようにする。

米倉：農地における地縁的な要素を考える場合、集落の境界は古くから決まっているため歴史的な背景（藩がどのように構成されていたか等）が非常に重要と思われる。その点についても踏み込んで考える必要があるのではないか。

井坂：今後、歴史的な背景も含めて考察を深めたい。

冬木：通作距離には物理的な制限があるため、地図にスケールが必要である。また、農地に行くまでの道路の状況がどのようになっているのかデータが欲しい。

井坂：道路状況についてのデータはあるため、そのデータを取り入れた見やすい地図を作製する。

冬木：5haを超える規模の農家は、各地域に数えるほどしか存在しない（ほとんどの地域で3戸未満）が、それらの農家は35haや40haとかなり規模が大きい。5ha未満の小規模農家と35ha以上の大規模農家の間の規模の農家はどのような状況なのか興味深い。また、農地集積には、一つの地域に複数の集積主体があるが、一つの地域における別の集積主体との関係についても調べる必要があると思われる。

長谷部：農地の地理的な分布についての議論と血縁や地縁についての議論がうまく関連付けられるとよい。